

福井県埋蔵文化財調査報告 第123集

福井城跡

— 足羽川激甚災害対策特別緊急事業に伴う調査 —

2 0 1 1

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

福井城は、本丸を環状に郭が取り巻く輪郭式平城であり、その城下町は現在の福井市中心市街地に広がっていました。しかし近代以降、市街地の再編整備が進むにつれ、往時の福井城の姿はほとんど失われてしまいました。ところが近年になり、福井駅周辺の連続立体交差事業・福井駅西口地下駐車場整備事業・市街地再開発事業等が中心市街地で進められ、それに伴う発掘調査により、かつての福井城の様相が少しずつ明らかになってきました。

このたび、平成16年の福井豪雨災害を受けて、足羽川の洪水対応能力を高める目的で激甚災害対策特別緊急事業が実施されました。それに先立ち、福井市中央2丁目の泉橋付近の発掘調査を行いました。その後の遺物整理事業も終了し、ここにその成果を報告できる運びとなりました。

調査では、武家屋敷地とそれに関わる石垣・堀・井戸等の遺構群を確認しました。また、多数の陶磁器、漆器碗や箸・下駄などの木製品など、当時の武士の生活を窺い得る遺物が出土しました。

今後、これらの資料が福井城の学術研究に資するものになること、そして本書が、生涯学習・学校教育などの場において、広く活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査および整理事業の実施にあたり、多大なご協力とご配慮を頂きました関係各位・機関の皆様に、厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

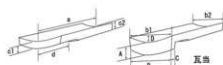
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 南 洋 一 郎

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが足羽川激甚災害対策特別緊急事業に伴い、平成19年度に実施した福井城跡(福井県福井市中央2丁目所在)の発掘調査報告書である。
- 2 福井城跡の調査は、福井県足羽川激甚対策工事事務所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、主任河村健史、嘱託職員長嶺睦が担当した。
- 3 発掘調査は、平成19年4月23日から平成19年7月24日まで実施した。出土遺物の整理作業は、平成20年4月1日から平成22年3月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は主任中原義史・嘱託職員岩田隆があたり、主任本多達哉、中原義史、主査御嶽貞義、福井県立歴史博物館主任河村健史が分担して執筆した。なお、執筆の分担は以下のとおりである。
河村 第1章、第3章、第4章第1節、第5章 中原 第2章、第4章第3節 本多 第4章第2節
御嶽 第4章第4節
- 5 福井城跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 6 検出遺構の図化・分層後の遺構断面図作成などを含む一切の測量業務を(株)日本海航測に委託した。分層・校正は担当者が行った。本書掲載に際しては、主任青木隆佳の協力を得て河村、長嶺睦が、これを一部改変して使用した。
- 7 出土遺物のうち、土器・陶磁器・石製品の製図・写真撮影は、(株)文化財サービスに委託した。製図の校正・図版作成は河村が行った。木製品の実測図版作成は本多が、写真撮影・図版作成は中原がおこなった。
- 8 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符号する。写真の縮尺は不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は、海拔高(m)を示し、方位は座標北を用いた。また、X・Y座標値は、国土地院座標系第VI系に基づく。
- 10 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 11 発掘調査には、地元の方々の参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。
- 12 第3図の「御城下絵図」1319は、松平文庫蔵(福井県立図書館保管)の資料である。また、第26図の「福井城下眺望図」、第27図の「福井城旧景」は、ともに福井市立郷土歴史博物館蔵のものである。両館より画像データの提供を受け、一部加工・加筆して使用した。
- 13 第24図の屋敷割りは、「御城下絵図」1319(寛文年間・大火前)をもとに、第25図の屋敷割り「福井分限之図」1337(享和3年)をもとに、現地形に合わせて一部を修正して制作した。
- 14 本文中で引用した福井城下絵図は、すべて松平文庫蔵・福井県立図書館保管のものである。
- 15 調査区番号は、FKJを福井城跡の略号とし、調査年次とその年の福井城関連調査順(工事立会を含む)の番号からなる。今回の調査区番号は、FKJ07-1である。なお、調査区は2区に分割されるため、調査回数にA・Bを付し区分した。

凡 例

- 1 本遺跡は、近世の福井城跡を中心とするが、下層には古代まで遡る遺構が確認される複合遺跡である。ここでは、慶長6年(1601)の結城秀康の越前入国・北庄城の改築を以て近世の始まりとする。
- 2 遺構図における断面の位置や立面等の見通し位置は、その両端を「-」で平面図中に示した。
- 3 断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編 新版『標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に拠る。
- 4 遺物実測図の縮尺は、土器・陶磁器は1/3、木製品は1/3・1/6、石製品は1/4、金属製品は1/2をそれぞれ基本とした。しかし、種別や個体の大きさにより、適宜これら以外の縮尺も使用した。
- 5 遺物観察表の計測値については、土器・陶磁器等は口径・底径・器高、それ以外の遺物は高さ(縦)・幅(横)・厚さ(奥行)を基本とした。特殊な器形や計測箇所の煩雑なもの等については、以下に計測箇所を示した模式図を掲載する。



石製平瓦

目 次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 遺構	
第1節 堆積状況	4
第2節 遺構各説	4
第4章 遺物	
第1節 土器・陶磁器	20
第2節 木製品	25
第3節 石製品	28
第4節 金属製品	30
第5章 まとめ	31

写真図版目次

図版第1	遺構 (1) A区2面全景 (2) A区5面全景	図版第5	(4) 遺構41川堆積状況 遺構 (1) B区1面全景 (2) B区3面全景 (3) B区2面土師質皿 出土状況および堆積状況 (4) 遺構134石列および 西壁土層堆積状況
図版第2	遺構 (1) 石垣 (2) 石垣角部	図版第6	遺構 (1) 遺構134石列周辺 (2) 遺構132・133石列
図版第3	遺構 (1) 遺構02石列および西壁堆積状況 (2) 遺構02石列 (3) 遺構03石列 (4) 遺構31石組溝	図版第7	土器・陶磁器
図版第4	遺構 (1) 遺構30堀および埋立て状況 (2) 遺構30堀埋立て状況 (3) 遺構41川完掘全景	図版第8	土器・陶磁器・石製品
		図版第9	木製品
		図版第10	木製品・金属製品

挿図目次

第1図	調査地の位置図	2	第14図	B区南壁土層図	17
第2図	調査区割図	2	第15図	B区西壁土層図	18
第3図	「御城下絵図」1319 における調査地の位置図	3	第16図	B区遺構図	19
第4図	1面遺構配置図	6	第17図	土器・陶磁器実測図1	21
第5図	2面遺構配置図	7	第18図	土器・陶磁器実測図2	22
第6図	3面遺構配置図	8	第19図	土器・陶磁器実測図3	23
第7図	4面遺構配置図	9	第20図	木製品実測図1	26
第8図	5面遺構配置図	10	第21図	木製品実測図2	27
第9図	6面遺構配置図	11	第22図	石製品実測図	29
第10図	A区北壁土層図・石垣実測図	12	第23図	金属製品実測図	30
第11図	A区東・西壁土層図	13・14	第24図	5面遺構と屋敷割対照図(寛文大火前)	32
第12図	A区遺構図	15	第25図	3面遺構と屋敷割対照図(寛文大火後)	32
第13図	B区北・東・南東壁土層図	16	第26図	「福井城下眺望図」(部分・芦田邸裏側)	32
			第27図	「福井城旧景」(芦田信濃邸・部分)	32

表 目 次

第1表	遺構觀察表	5
第2表	土器・陶磁器觀察表	23
第3表	漆器觀察表	28
第4表	下駄觀察表	28
第5表	木製品觀察表	28
第6表	石製品觀察表	28
第7表	金屬製品觀察表	30
第8表	錢貨觀察表	30

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

今回の調査地点は、福井城の南西部、現在の福井市中央2丁目に所在する(第1図)。福井城下絵図等によると、上級武士芦田家の屋敷地の一部と推定される。地元自治会では、現在でも「芦田屋敷町」「芦田元町」などの名称が使われ、この地が芦田邸跡であることを今に伝えている。

平成16年の福井豪雨を契機に、足羽川の洪水対応能力を高めるため、堤防の改修がおこなわれることとなった。工事区域には、周知の遺跡としての福井城跡が約1kmにわたって含まれており、この部分の埋蔵文化財の扱いについて、足羽川激特対策工事事務所と協議した。その結果、各工事地区の施工前には工事方法等について協議し、掘削が遺構面に達する等、遺跡に影響を及ぼす恐れのある部分については、工事立会等を実施することとした。また、堤防の改修とともに橋梁の改築もおこなわれることになった。このうち泉橋では、橋の架け替えにともない、取り付け道路の路線変更がなされることになり、この部分について、平成18年3月13日および平成19年3月6日に試掘調査を実施した。その結果、遺構面が確認され、本調査をおこなうこととなった(FKJ07-1地点)。なお、この調査区のほぼ中央を福井市水道管が通るため、この部分については福井市文化財保護センターが調査を実施することとなり、本調査区は南北に分断されることになった。よって、調査順に南側をFKJ07-1A区、北側をFKJ07-1B区として区別した(第2図)。以下、本調査および工事立会の経過について記す。

第2節 調査の経過

調査は平成19年4月23日から開始し、同年7月24日に終了した。さらに、調査時には未買収であったFKJ07-1C区は工事立会で対応した。平成18年の試掘時に認識された遺構面は2面程度であったが、調査を進めると、最大6面の遺構面が確認された。また、遺構の切り合い等も複雑で、遺構面と遺構群の整合性を持たせることに苦慮した。このため調査時点と報告書作成時の生活面に関する認識の変化があることを了解願いたい。加えて、南北に分断されたFKJ07-1A区とFKJ07-1B区の生活面や遺構のつながりに齟齬が生じている可能性もあるが、今後、福井市文化財保護センターの調査地区の成果報告を以て、それが修正されることを願う。

FKJ07-1A区

平成19年4月23日/現地作業開始。25日/石垣写真撮影・測量。

5月7日/最上面全景写真撮影。9日/2面全景写真撮影。11日/遺構04・07・08等測量・写真撮影。

14日/3面全景写真撮影。15日/西壁写真撮影・測量。21日/遺構30掘削。28日/5面石垣下礎石写真撮影。

6月1日/遺構41掘削開始。7日/全景写真撮影。作業終了。

FKJ07-1B区

平成19年6月15日/現地作業再開。精査・擾乱除去。19日/最上面全景写真撮影。27日/2面全景写真撮影。

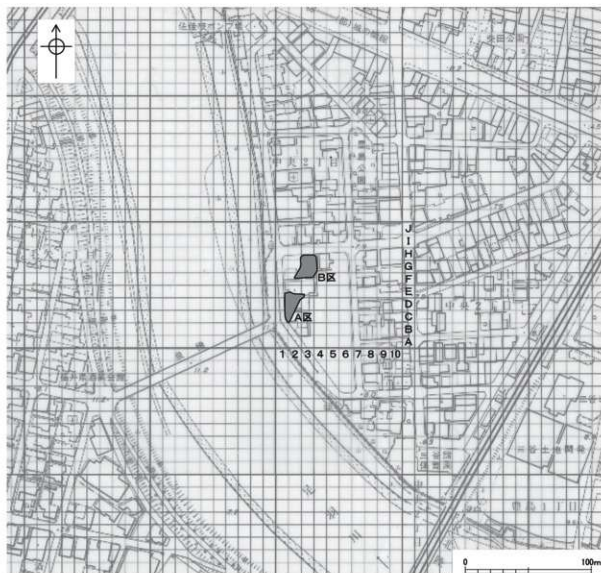
7月19日/3面全景写真撮影。24日/4面全景写真撮影。遺構135完掘。調査完了。

FKJ07-1C区

平成20年11月/工事掘削範囲内は擾乱により遺構が確認できず。



第1図 調査地の位置図(縮尺1/25,000)



第2図 調査区割図(縮尺1/3,000)

第2章 遺跡の位置と環境

近世の福井城は、慶長6年(1601)に、家康の次男である結城秀康が68万石の領地をたまり、築城を開始したことに始まる。この地は、九頭龍川の支流足羽川と北陸道が交わる交通の要衝であり、一乗谷に本拠を置いた戦国大名朝倉氏も、城館を設けて一族を配していた。福井城の築城工事は、慶長11年(1606)ころ一応の完成を見たと言われるが、城下絵図の記載や発掘調査成果などから、その後も17世紀後半まで堀や門等の増設・新設が続けられたようである。

この城下の構造に大きな変化をもたらすことになった出来事として、寛文9年(1669)の大火があげられる。これにより、本丸、天守をはじめ、武家屋敷379軒や町屋2676軒あまりが焼失した。その復興に際し、屋敷割の変更のほか、盛土や溝の改修、火除地の設置等大規模な工事がおこなわれたことが、これまでの発掘調査からわかっている。また、貞享3年(1686)の「貞享の大法」では、知行高の半減に伴い藩士2,000人あまりが削減され、武家屋敷地に多くの空地が見られるようになった。これを機に改修された道路もある。

明治維新後、福井城は外郭部から門・堀・櫓等の取り壊しや堀の埋め立てが進められ、現在では本丸とそれを取り巻く内堀が残るだけとなっている。

今回の調査地点は、二ノ丸・三ノ丸の東南方向を画す「百間堀」が、足羽川につながる部分にできた半島状の場所にある。この付近では築城以前、足羽川にその支流である吉野川が合流していた。築城に際し、吉野川の合流地点を足羽川の上流へ付け替え、その旧流路を利用して作られたのが百間堀である。新しい吉野川の流路は荒川と呼ばれ、福井城の東南部の最も外側を画すものとなった。



第3図 「御城下絵図」1619における調査地の位置図

第3章 遺構

第1節 堆積状況

川に近い低地のため、造成を繰り返した過程が看取できた。A区は北・東・西面について堆積状況を図示する(第10・11図)。堆積状況は遺構02石列を境に大きく相違する。東面(第11図)で見てゆくと、遺構02から北側は、遺構30堀を砂で埋め立てた後、遺構02の天端まで川砂と思われる荒砂と粘質土あるいは玉砂利を主体とした砂の互層となっており、明確な遺構面を求めることは難しい。なお、A・B両区にまたがって、完形の土師質皿が粘質土層表面(第11図-1-54層・第15図-24層)で確認されている。この土師質皿確認面を生活面とするのは断面で見ると限り疑わしいが、盛土過程の間層とするには、土師質皿の分布や粘質土層の広がりが広範囲であり、ここでは検出面・土師質皿の性格とも保留としておく。遺構02より南側は、層厚の薄い整地層が幾重にも見られ、これを何度も攪乱が切っている。遺構02の下段積石面と遺構33礎石が据えられる面は、標高が近いので同一面の可能性は高いが、西面断面図でみると遺構02は2面3期に分けられる(詳細後述)ため、2面の生活面が確認できる。東面の遺構02下の水平堆積は、上半分の0.2mは人工の盛土と考えられるが、下半のシルト質砂層、および海拔5m以下の層は自然堆積と考えられる。

B区は東・西・南・北の4面について堆積状況を図示する(第13・14・15図)。おおよその状況はA区の遺構02より北側と類似しており、一連のものと考えられる。

第2節 遺構各説

調査区が狭い上、2地区に分断されているため全容を把握できる遺構はなかった。確認された主な遺構は石垣、石列、溝、井戸、川等である。以下、個別遺構を紹介していくが、造成面毎の遺構の帰属・変遷については、まとめで参照されたい。

石垣(第10図-2) A区の西壁法面内で約6mにわたって確認された。石材は笏谷石である。石積み段数は6段、高さは1.78mである。最上段の石材は一石のみ残る。その形状から天端石と考えられ、上面の標高は7.18mを測る。基底部には0.2~0.3m程度の笏谷石の栗石を敷くが、胴木の有無は不明である。栗石の上に最下段の根石を並べる。石材は大小あり、地中に埋め込まれるため表面はほとんど調整されていない割石である。2段目から上の石は表面をノミで平らに調整する。石の間は笏谷石の小さい割石を間詰めとする。石積み方法は、福井城の石垣で一般的な小口積みをしたものは少なく、長手方向に積んだものが多い。石垣北側はそのまま福井市の調査区へ延びるが、南側は確認された部分で角(端部)となり途切れる。角部分の石積みは算木積みにならず、明確な処理はなされていない。ただし、石垣の3・4段目の角部分は丁寧な削り処理がなされている。このような処理は、福井城の本丸天守台でも見られる。また、2段目の角処理は上端部だけにあり、ここまでは埋められていたものと考えられる。

堀(第7図) 遺構30堀は深さ1.59mで、東肩部が調査区外のため幅は不明である。北壁より8mの地点で止まるか、東へ曲がる。廃絶時には川砂を用い、南側から一度に埋め立てた様子が断面(第11図-1)から看取できる。底部で確認された緑釉唐津碗(第17図30-3)などから、17世紀後半頃に廃絶したと考えられる。

通路状遺構(第12図-1) 石垣南端から3.5m南を東西に2m幅で走り、西壁土層図から2期に分けられる。古期には中央を東西に幅20cmの遺構07溝が通り、遺構02石列に対し10°南に振る。この角度は

3・5面の遺構群と一致する。新期では屋敷地内の盛土に伴い、北肩は遺構02で護岸し、南肩は盛土のまま30°程度の傾斜の法面とする。ただし、南肩下端線の角度が古期の溝と一致するようにも見え、南肩は古期から存在する可能性もある。明確な路面は不明だが、標高6.36mで部分的に笏谷屑石面が、6.18mで玉砂利を多く含んだ層がみられる。

石列(第12図-3・4・6、第16図) 通路状遺構北側の遺構02石列(第12図-6)は笏谷石を最高で3段積みし、高さ0.7mで裏込はない。前面は石垣同様ノミ調整痕を残す。遺構03・05石列(第12図-3・4)は笏谷石割石を2段積みし、高さは0.45mである。遺構134石列(第16図-2)は笏谷石割石を3段積み、132・133石列(第16図-1)は2段積みである。いずれも裏込めはなく、性格不明である。

井戸(第4図) 2基が確認された。遺構01井戸の井筒は笏谷石をくりぬいたもの、遺構04井戸の井筒は桶である。石材くりぬきの井戸枠は、幕末から明治期以降に見られる。掘方の遺物・層位から、ともに19世紀代のものと考えられる。

礎石(第12図-2) 遺構33礎石は、35×35×25cmの方形笏谷石で構成される。礎石b～c間の距離は0.7mである。重なる礎石a・bは同一地点での建て替えを示すと思われる。調査範囲が狭く性格は不明である。

溝(第8図、第12図-5) 遺構31石組溝(第8図、第12図-5)は南北に流れ、東西両岸を石積護岸とする。護岸は笏谷石の2段積みで高さ40cm、石材は長手方向に用いる。上面はノミで丁寧調整され、建物の基礎の可能性もある。遺構32溝(第8図)は幅0.42m、深さ0.35mの断面箱形の素掘り溝である。直接接しないが、遺構40川と方位は一致する(第9図)。

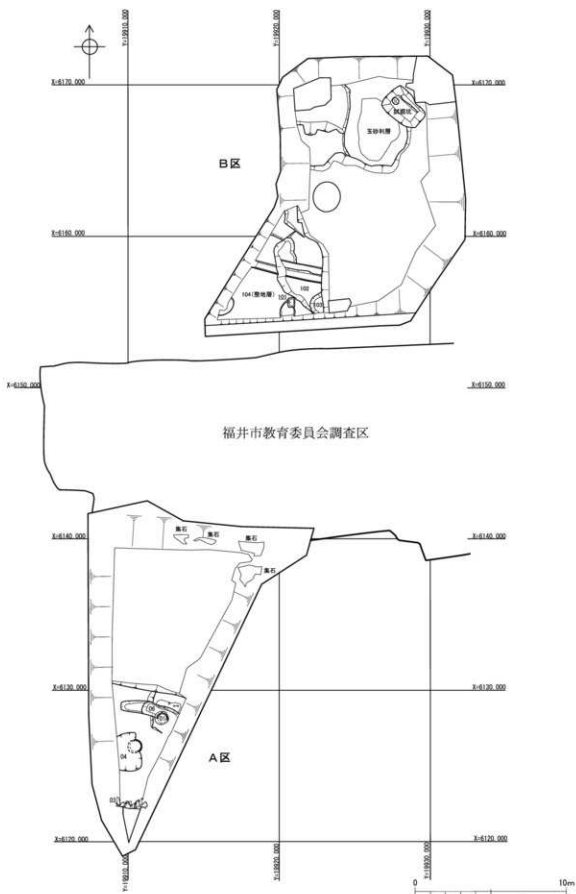
川(第9図) 遺構41川は南北に流れ、遺物が多く出土した。これらの遺物は出土状況から一括投棄されたものと考えられる。上層(遺構40)は砂利で占められ、上層底面は鉄分が凝固し硬化面となる。

第1表 遺構觀察表

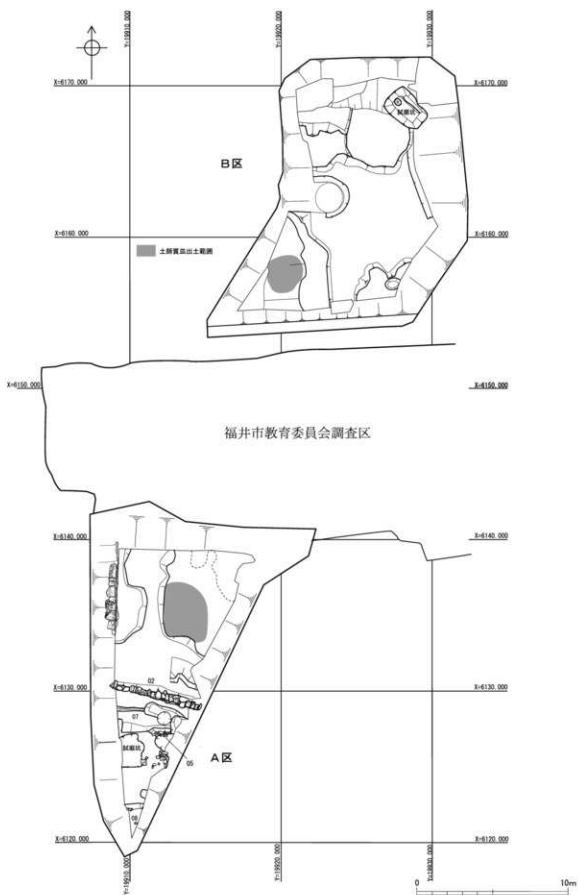
[illegible]

【注】 主な建築物の項目について、下記の略称を使用している。

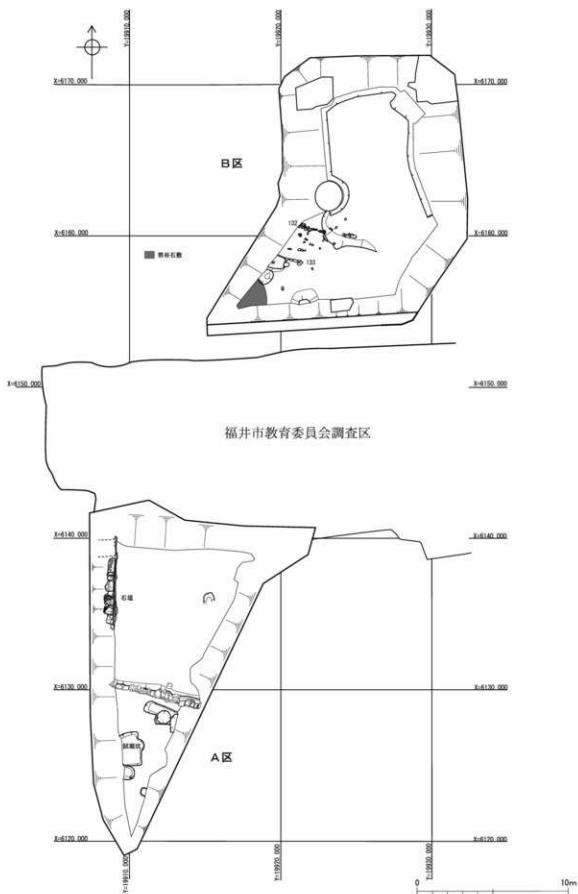
上【一】→銅貨上上、把【一】→把柄銅貨、世【一】→世津世、海【一】→瀬戸海銅貨、瀬【一】→瀬戸先遣後銅貨、住【一】→住家後、結【一】→結成後、中【一】→中田銅貨、結【一】→結成後、其【一】→その他の項地の銅貨、右【一】→右製金、本【一】→本製金



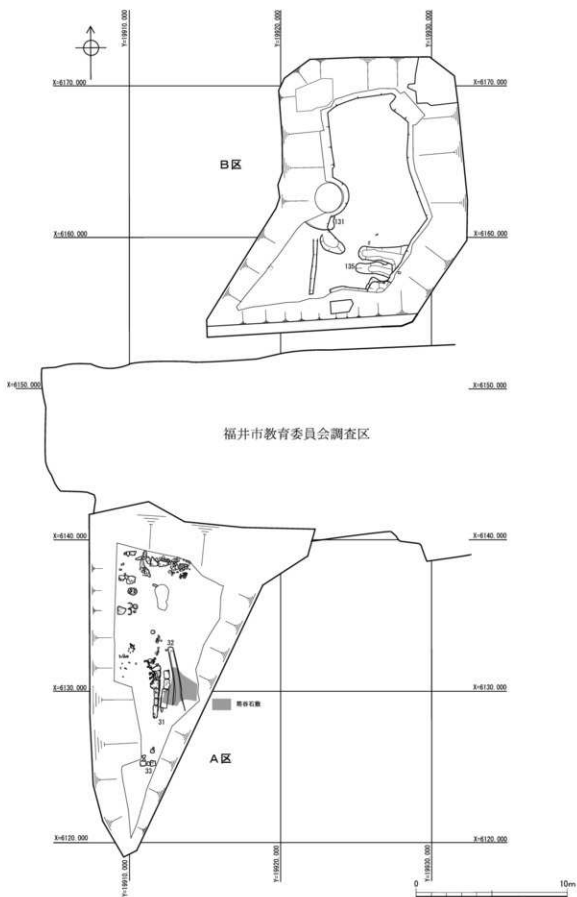
第4図 1面遺構配置図(縮尺1/250)



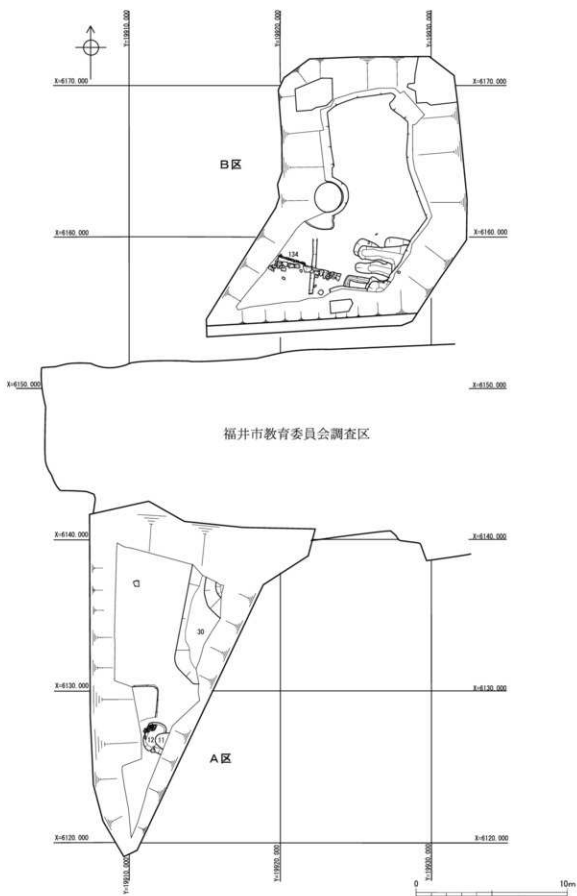
第5図 2面遺構配置図(縮尺1/250)



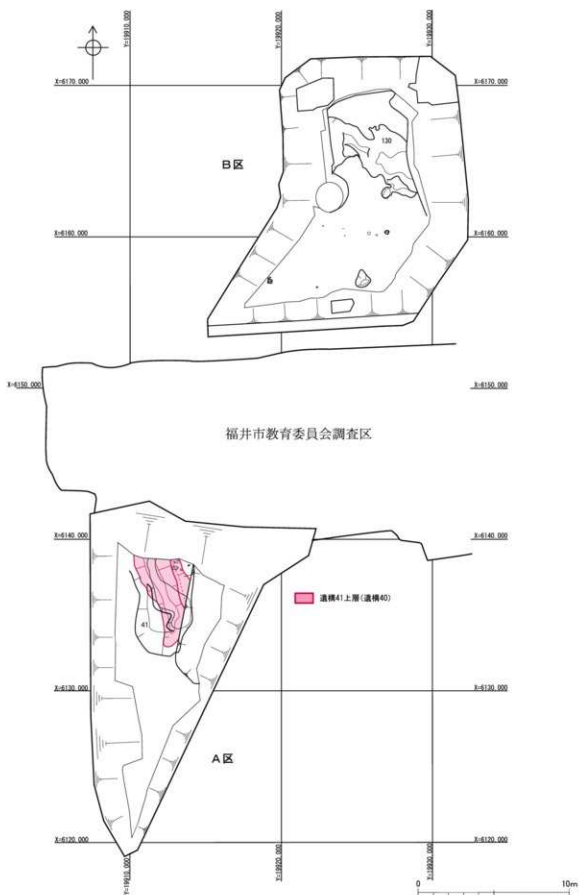
第6図 3面遺構配置図(縮尺1/250)



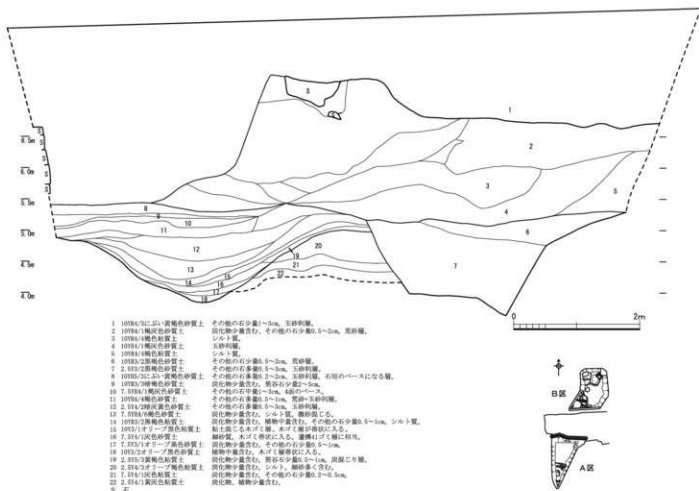
第7図 4面遺構配置図(縮尺1/250)



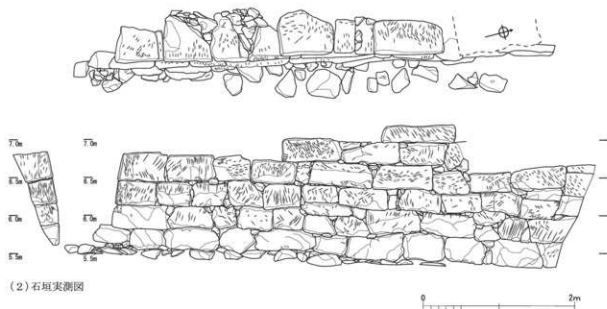
第8図 5面遺構配置図(縮尺1/250)



第9圖 6面遺構配置図(縮尺1/250)

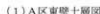


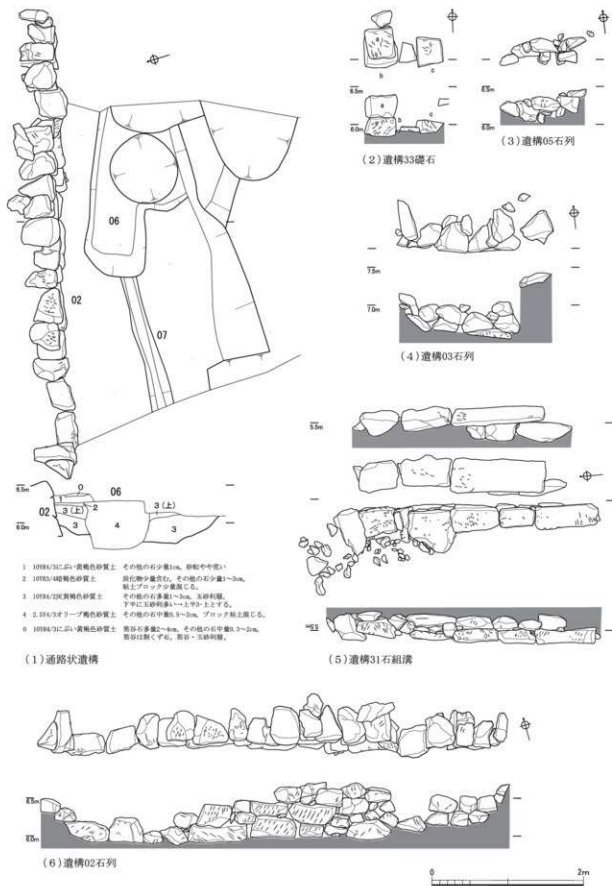
(1) A区北壁土層図



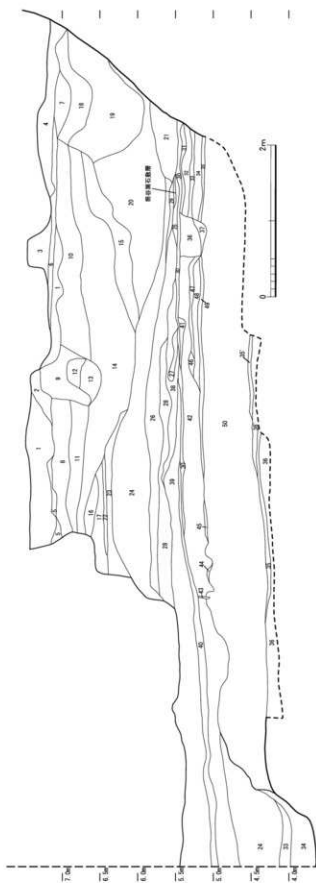
(2) 石垣実測図

第10図 A区北壁土層図・石垣実測図(上段:縮尺1/60、下段:縮尺1/50)



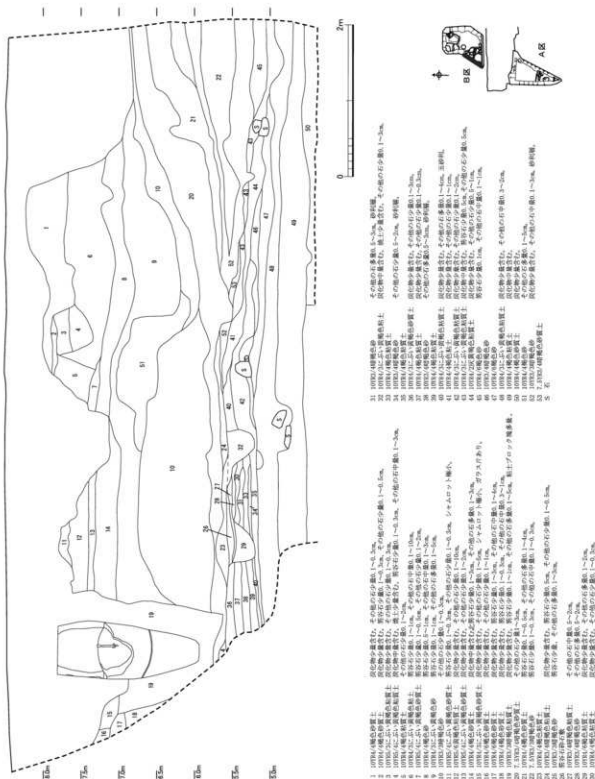


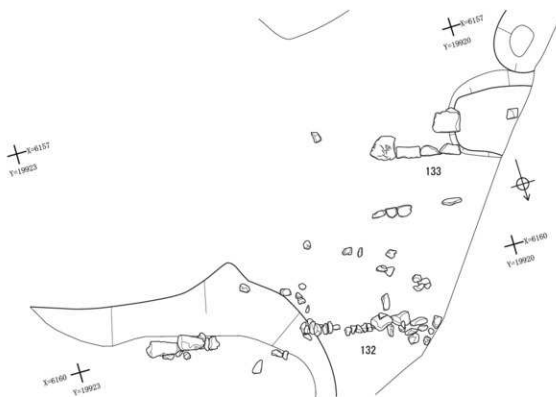
第12図 A区遺構図(縮尺1/50)



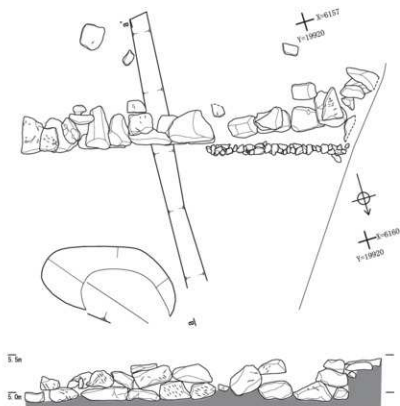
第14图 B区南壁土层图(缩尺1/50)

- [illegible]

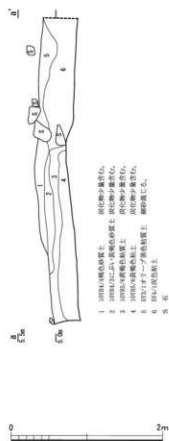




(1) 遺構132・133石列



(2) 遺構134石列



第16図 B区遺構図(縮尺1/50)

第4章 遺物

遺物は主として遺構41川から出土し、他の遺構および整地層内からの出土は少量である。3面直上では完形の土師質皿がまとまって出土している。遺物は17世紀前半から中頃のものを中心である。

第1節 土器・陶磁器

本文では遺物の概要を産地ごとに紹介し、挿図では出土遺構(第17・18図)・包含層(第19図)ごとに実測図を掲載する。

伊万里焼(肥前磁器) 碗・皿等食器類が中心である。41-1は口縁部に雷紋、体部に山水図を巡らす。41-2は高台脇を高台と直角に削り、体部は角度をきつめに立ち上げる。口縁部は欠けているが、その形態的特色から天目形碗と考えられる。41-9は径8寸(24cm)の皿である。口縁部はやや外反し、高台径は9cmで口径との比率は1:2.6である。器壁はやや厚く、内外面に青磁釉を掛ける。大橋Ⅲ期以降の中国青磁写しと違い、シャープな印象は薄く古さをみせる。41-8は染付壺である。口縁部は欠けるが頸部は垂直に立ち上がり、径が大きく口は広い。胴部は球形に近く、高台は基筒底状で径が大きい。体部及び頸部に染付文様を描く。体部の唐草紋は、呉須染付をはじめ、初期伊万里(大橋Ⅱ-1期)でも多く見られるものである。104-1・2・3はいずれも大橋Ⅲ期のものと考えられる。

唐津焼(肥前陶器) ほとんどが碗で皿類は少なかった。また、絵唐津や灰釉掛けの大橋Ⅰ期頃のものは少ない。41-5は体部が直線的に立ち上がり口縁部はやや外反する。竹の節状に削られる高台を除き、灰釉が掛けられる。初期の唐津の特色をみせる。30-1は呉器手碗である。口径が11.6cmと大ぶりで器壁もやや薄く丁寧に削られ、Ⅲ期に量産されるものとは一線を画し、17世紀前半のものと考えられる。30-3と10-1は筒碗で、内外面および高台内までも透明釉を掛ける。高台内の削り方や釉の掛け方は呉器手碗と共通する。また、器形は、伊万里焼でⅡ-1期に大ぶりの筒碗が多く作られるため、その影響を受けたものと思われる。30-3と10-1は本来セットであったとも考えられる。30-2も筒碗である。高台の形状は30-3等と違い、Ⅱ期の伊万里筒碗と類似し畳付の幅が広い。また、内面に透明釉、外面に青緑釉(銅緑釉)と釉薬を掛け分けるのは、18世紀前半に流行するいわゆる青緑釉陶器に共通する。08-1は胎釉碗で、福井城跡各地点で17世紀後半に多く見かける。

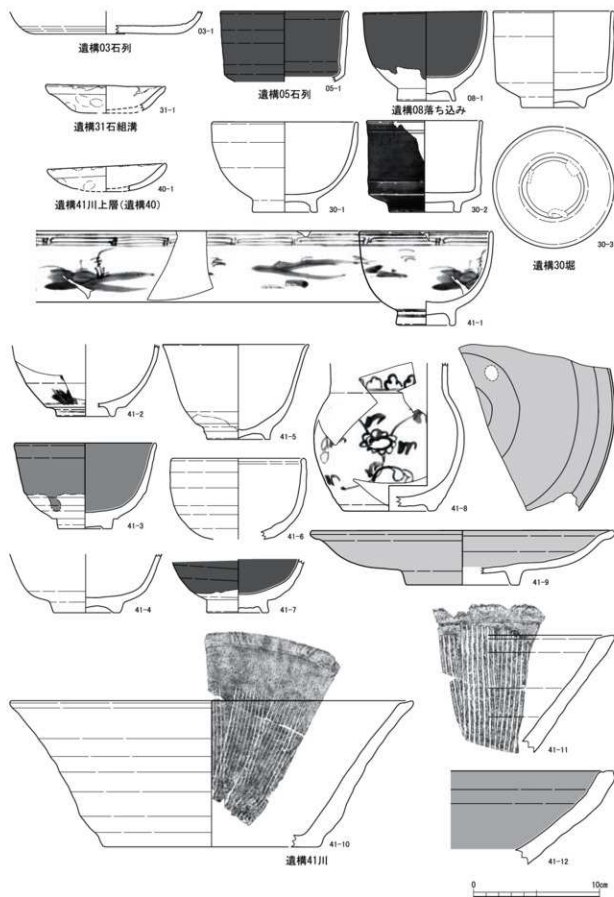
瀬戸美濃焼 碗類が中心である。05-1は瀬戸では珍しい筒形碗である。内外面に鉄釉を掛ける。釉調・胎土から連房登窯期のものと考えられる。41-3は碗形で、内外面に銅緑釉のみを掛けたいわゆる総織部である。41-4は内外面および高台内まで鉄釉を掛ける。連房登窯期のものとみられる。41-6は薄緑色の灰釉をかけた大窯期のものである。41-7は菊花天目風の釉調である。高台はやや高く削り出される。

越前焼 鉢・甕が見られる。41-10・11の描鉢は、口縁下の沈線は完全に消えるが外面に明確なロクロ目が見えず、17世紀前半から半ば頃の特徴を示す。41-12は平鉢で錆釉を塗る。104-4は甕である。

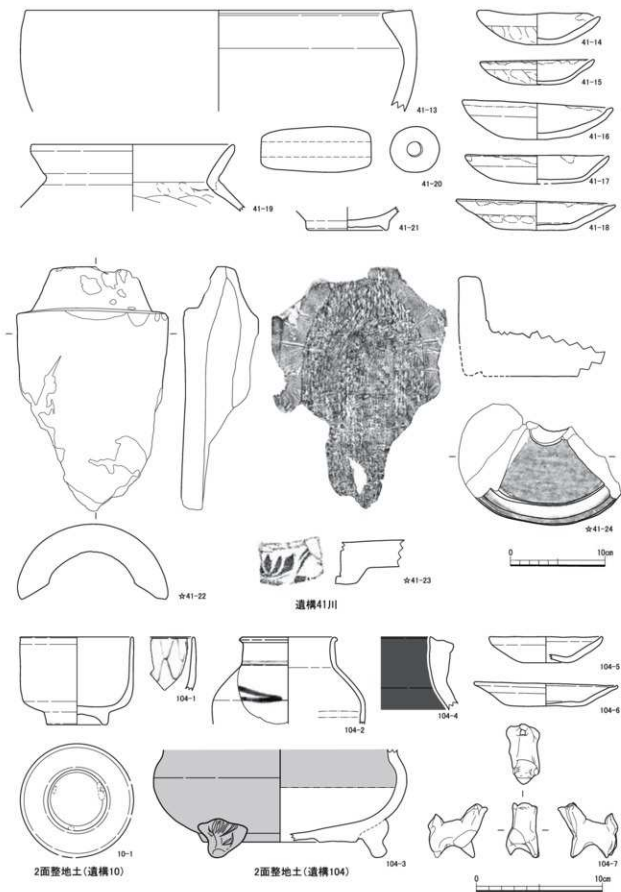
土師質土器 皿は口径9cmと12cmのものに大別される。3面に完形で散在するもの(A2-2~4、B2-1・2・4)はすべて、見込みに圈線を持ち口縁をつまむ104-6と同形態のものである。

瓦 出土量はわずかである。41-22~24はいずれも燻し瓦で、施釉瓦(赤瓦)は確認されなかった。軒平瓦41-23は中心に蓮弁を持つ福井城創建期のものである。41-24は鬼瓦の端部であろうか。

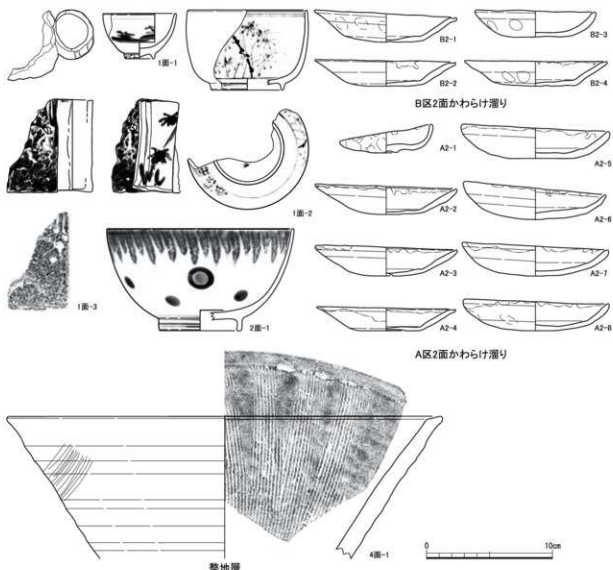
古代の土器 土師器甕(41-19)、灰釉陶器碗(41-21)がある。灰釉は見込みにわずかに見える。



第17図 土器・陶磁器実測図1 (縮尺1/3)



第18図 土器・陶磁器実測図2 (縮尺1/3 ☆印: 縮尺1/4)



第19図 土器・陶磁器実測図3 (縮尺1/3)

第2表 土器・陶磁器観察表

A区 透焼砂石列・表説 (標図: 第17図)									
検出%	器種	石表油彫	法量 (cm)		色調		成形・調整・その他		実測%
17-02-1	煎餅	—	口径	底径	高さ	明褐色・黄褐色	—	—	5~7
A区 透焼砂石列角 (標図: 第17図)									
検出%	器種	産地	法量 (cm)		釉薬	成形・調整・その他		実測%	
17-05-1	煎餅	瀬戸煎餅	口径	底径	高さ	鉄釉	口タコ成形	—	5~7
A区 透焼砂石列角 (標図: 第17図, 図説: 第8)									
検出%	器種	産地	法量 (cm)		釉薬	成形・調整・その他		実測%	
17-08-1	煎餅	瀬戸	口径	底径	高さ	鉄釉	底縁縮め	—	5~7
A区 整地土層 (透焼砂石列・表説・標図: 第18図, 図説: 第8)									
検出%	器種	産地	法量 (cm)		釉薬	成形・調整・その他		実測%	
17-10-1	煎餅	瀬戸	口径	底径	高さ	透明釉	底縁縮め	—	5~7
A区 透焼砂石 (標図: 第17図, 図説: 第7)									
検出%	器種	産地	法量 (cm)		釉薬	成形・調整・その他		実測%	
17-20-1	煎餅	瀬戸	口径	底径	高さ	鉄釉・黄入	底縁縮め	—	5~7
17-20-2	煎餅	瀬戸	口径	底径	高さ	鉄釉・黄入	底縁縮め	—	5~7
17-20-3	煎餅	瀬戸	口径	底径	高さ	鉄釉・黄入	底縁縮め	—	5~7
A区 透焼砂石層・埋土 (標図: 第17図)									
検出%	器種	石表油彫	法量 (cm)		色調	成形・調整・その他		実測%	
17-25-1	煎餅	〇	口径	底径	高さ	明褐色	底縁縮め・口タコ・底縁縮め	—	5~7

第4章 遺物

A区 透視41川上層(透視40)・5層~道 (掃面:第17層)

種類%	器種	灯芯法照	品質 (cm)			色調	成形・調整、その他	実測値
			口径	底径	高さ			
17~40%	土甕甕皿	○	9.5	—	3.25	相模色	再加工十字、指オナシ	3.0~4.0

A区 遺構41川・炭層 <土器・陶磁器> (解説: 第17-18頁, 図版: 第7

[illegible]

A区 透視41川・虎形 〈瓦〉(傳圖:第18圖, 附圖:第7)

平均値%	種別	既成法	位置 (cm)						文相	語り	成相・語相・その他	英語%	
19-41(2)	九尾	横上	12.0	6.4	7.9	5.9	15.9	25.0	九尾頭	九尾肩	九尾尾	面相に布着有	3-12
種別%	既成法	13.0横上	13.0横上	6.4中長	6.4中長	7.9中長	15.9中長	25.0中長	九尾頭	九尾肩	九尾尾	成相・語相・その他	3-12
19-41(1)	新平良	横上	—	—	7.6肩中	3.3	5.7	3.9	五子頭	五子肩	五子尾	面相に布着有	3-12
種別%	既成法	—	—	—	—	—	—	—	五子頭	五子肩	五子尾	成相・語相・その他	3-12
19-41(2)	鬼丸九	横上	12.0	—	12.0肩中	—	—	—	九尾頭	九尾肩	九尾尾	面相に布着有	3-12
種別%	既成法	12.0横上	12.0横上	—	—	—	—	—	九尾頭	九尾肩	九尾尾	成相・語相・その他	3-12

8区 豊地土1面下(道幅104) (挿図:第18図、図版:第7)

時刻%	品名	主原料：石炭油類 副原料：その他	比重 (g)	主原料：石油類 副原料：無機	成形：調整、その他	異点%
		口底	底底	底底		
10-104-1	銅	銅	—	4.2 (底)	底底	10-104-1
10-104-2	銅	銅	7.9	6.9 (底)	底底	10-104-2
10-104-3	青銅	銅	11.2 (底)	8.5 (底)	底底	10-104-3
10-104-4	銅	銅	—	5.9 (底)	底底	10-104-4
10-104-5	主原料：銅 副原料：銅	銅	19.3 (底)	1.3 (底)	底底	10-104-5
10-104-6	銅	銅	11.4	1.3 (底)	底底	10-104-6
10-104-7	主原料：銅 副原料：銅	銅	1.6 (底)	1.3 (底)	底底	10-104-7

A区: 山下·砂層 (挿図: 第19図、図版: 第6)

採収地%	品種	産地	生産 (kg)			結果	成熟・調整・その他	実収%
			口係	底係	真さ			
19-1産1	小作	肥前	3.6	2.2	3.6	受付	高良田出、高良田市有、高良田村有	47.38
19-1産2	大田	肥前	9.7	5.8	6.5	受付	高良田出、高良田市有、高良田村有	47.37
19-1産3	福岡県中	肥前	産大坂6.8	福岡市3.6	7.4	高良田市・高良田村・高良田村	高良田市・高良田村・高良田村	47.37

8区 2面 (碑文:第19回,国版:第8)

項目%	温度	行石油酸	重量 (g)			色調	成分・調剤、その他	薬効%
			口酸	高1	高2			
調剤1-1	主成分	○	11.3	—	2.0	明褐色	内開し字、見開し字・調剤、口2つ、外開し字・主成分	1-10
調剤2-2	主成分	○	11.0	5.9	2.1	暗褐色	内開し字、見開し字・調剤、口2つ、外開し字・主成分	1-10
調剤3-3	主成分	—	9.6	—	2.15	暗褐色	内開し字、見開し字・調剤、口2つ、外開し字・主成分	1-10
調剤4-4	主成分	○	11.3	6.6	2.6	灰白色	内開し字、見開し字、口2つ、外開し字・主成分	1-10

A 紙 2面 (韓国:第19回、国版:第8)

項目No.	課程	土師資、技術資格 土師資、資格	授業 内容	授業時間 (分)	土師資、技術資格 土師資、資格	授業 内容	授業時間 (分)
1-2-1	土師資教育	○	基礎	14.8	土師資	基礎	14.8
1-2-2	土師資教育	○	基礎	7.4	土師資	基礎	7.4
1-2-3	土師資教育	○	基礎	11.3	土師資	基礎	11.3
1-2-4	土師資教育	○	基礎	11.3	土師資	基礎	11.3
1-2-5	土師資教育	○	基礎	11.3	土師資	基礎	11.3
1-2-6	土師資教育	○	基礎	11.3	土師資	基礎	11.3
1-2-7	土師資教育	○	基礎	11.3	土師資	基礎	11.3
1-2-8	土師資教育	○	基礎	11.3	土師資	基礎	11.3

附註 3進 (轉閱:第14回, 武庫:第8)

材料名	品種	産地	法量 (cm)		軸量	成形・調製、その他	実収%
			口径	底径			
1. 土物類	土物類	土物類	2.0 (4.0)	1.0 (2.0)	1.0 (2.0)	1.0 (2.0)	1.0 (2.0)

【注】成形・調整・その他の項目では、主として郵政を使用している。

内【一内面、内】一内面、見【一見込、見】一見込、高【一高台、高】一高台、銀【一銀材

第2節 木製品

木製品は49点を図示した(第20・21図)。その内訳は、箸9点、墨書木製品1点、木筒1点、櫛2点、漆塗碗9点、柄杓1点、下駄9点、容器5点、釣瓶1点、灯明台1点、栓1点、把手1点、柄1点、折敷2点、箱物3点、加工木2点である。大部分は遺構41川からの出土で、これらは共伴する陶磁器から17世紀中葉のものと考えられる。

箸(第20図1～9)のうち、4と8は片方の端だけが細い片口箸であり、他は両端とも細い両口箸である。長さは24.4cm～25.6cmで、断面形は長方形に近いものから円形に近い多角形のものまでである。

墨書木製品(第20図10)は片面にのみ墨書があり、2か所に釘穴がある。上部は斜めに加工される。

木筒(第20図11)は表裏に墨書があるが、文字は判読できない。一端の左右に切り込みがあり、荷付れだと考えられる。

櫛(第20図12・13)のうち、12は歯の目が粗い解櫛で、13は目が細かい梳櫛である。ともに櫛の外形は比較的急なカーブを描き、棟上部の断面は楕円形を呈す。

漆塗碗(第20図14～22)のうち、14・15・17・18は高台部が厚く、大振りのため飯碗に、16は高台が高く器高が低いため腰高に、19～22は高台部が薄く、小振りのため汁碗に分類される。ただし、21は器高が低いので蓋の可能性もある。上塗は、すべて外黒内赤色である。漆絵は内面に描かれたものは無く、すべて外面にある。漆絵には鶴・亀・桐・巴・羽根・植物等がある。鶴・亀が多く、14は鶴・亀・松を描く蓬萊文であり、18も鶴・亀が描かれ、20も鶴である。14・16・18・22は漆絵が全周し、19・20は3単位の文様が巡る。21だけが2重円の圈で漆絵を囲む。漆絵の使用色は、ほとんどが赤であるが、15・22には銀、14には赤・黄・銀が使われている。

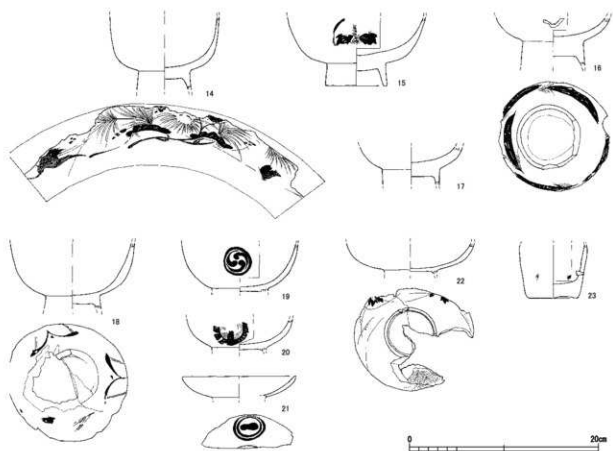
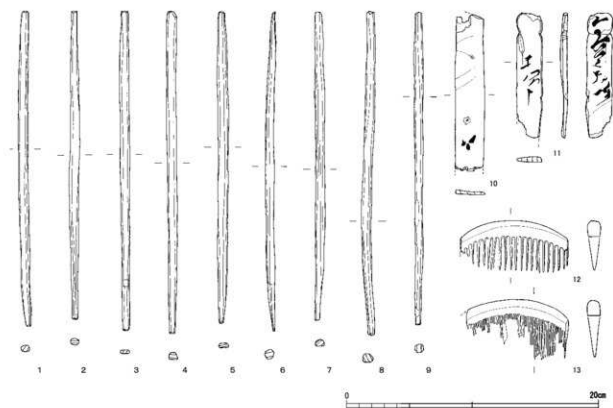
柄杓(第20図23)は口径約7cmで、柄の一部が残存する。

下駄(第21図1～9)のうち、1・2・3・6・7は一本の連歯下駄である。平面形は1～3は方形で、6は方形の側面がやや湾曲し隅丸となり、7の子供用は小判形である。6には前後の歯に補修用の鉄釘が残存している。全体に歯の摩耗が激しい。4・8は差歯の露卯下駄である。平面形は4の子供用が楕円形で、8が方形である。5と9は刎り下駄である。5は穴の周辺部分のみ方形に決られる。9は穴が1つで後歯が刎り出される。

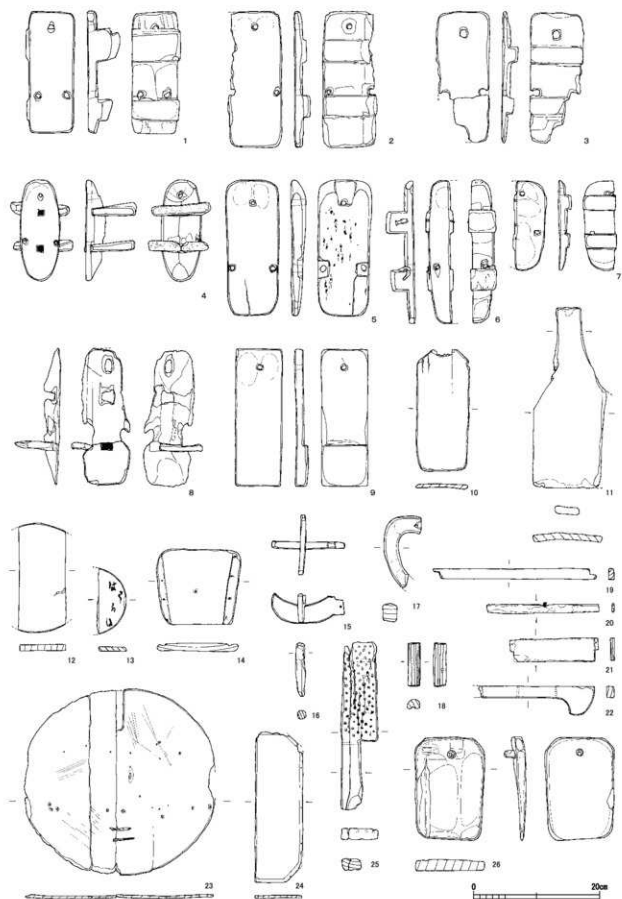
容器(第21図10～13・23)のうち、10・11は桶等の側板で持ち手が付く部分と考えられる。12は曲物もしくは桶の底板、13・23は曲物もしくは桶の蓋である。23には把手を固定していた釘穴が2列に並ぶ。

釣瓶(第21図14)は側面の部材で、中央に横棒を固定するための穴がある。灯明台(第21図15)は、2枚の板を十字に組み合わせたもので、この上に灯明皿を置く。栓(第21図16)は直径1.4cmで、断面は円形を呈し、先端を細く加工する。把手(第21図17)は調度品等の把手で、断面は隅丸方形である。柄(第21図18)は工具などの柄で、中央に7mmの挟りが入る。折敷(第21図22・24)のうち、22は脚で釘穴が2箇所ある。24は底板で約8寸の大きさである。箱物(第21図19～21)は表裏とも黒漆塗りである。20には結束用の紐が残る。

加工木(第21図25・26)のうち、25は厚さ2cmほどの長方形の板の表面に、径4mmほどの穴が縦に1mm間隔、横に5mm間隔に開けられ、鉄釘が打たれている。断面長方形の柄が付く。26は平面形が隅丸長方形で、上部に円形の柄の一部が残存する。断面形は逆三角形を呈し、一端が薄く加工される。ともに用途不明である。



第20図 木製品実測図1 (1~13: 縮尺1/3、14~23: 縮尺1/4)



第21図 木製品実測図2 (縮尺1/6)

第3表 漆器観察表

検出番号	調査区	遺構番号	時期	器種	上					漆量 (cm)				備考
					内面	外面	位置	色	検出箇所(箇所)	口縁	器高	器口径	器底径	
20-14	A区	柱川(足棚)	12c中葉	飯碗	赤	黒	赤・金	赤・黄・黒	漆文(動・幾・花)	11.40	12.80	13.70	12.00	
20-15	A区	柱川(足棚直上)	12c中葉	飯碗	赤	黒	赤・黄	黒	○	13.40	17.30	6.5	2.5	
20-16	A区	柱川(足棚直上)	12c中葉	飯碗	赤	黒	赤・金	赤	漆文	12.00	15.60	16.70	12.50	二次利用
20-17	A区	柱川(足棚直上)	12c中葉	飯碗	赤	黒	赤	黒	○	10.40	14.00	16.40	11.70	
20-18	A区	柱川(足棚)	12c中葉	飯碗	赤	黒	赤・金	赤	漆・幾	12.40	16.50	16.40	11.30	高台・足込み数欠損
20-19	A区	柱川(足棚)	12c中葉	汁椀	赤	黒	赤・3	赤	漆・二ツツ	12.20	15.10	15.30	10.30	
20-20	A区	柱川(足棚)	12c中葉	汁椀	赤	黒	赤・3	赤	漆	11.20	13.40	13.60	9.60	
20-21	A区	柱川(足棚直上)	12c中葉	汁椀	赤	黒	赤・黄	赤	漆	12.8	12.40	15.80	9.10	
20-22	A区	柱川(足棚直上)	12c中葉	汁椀	赤	黒	赤・金	黒	縞物など	13.40	13.20	15.40	9.40	

第4表 下駄観察表

検出番号	調査区	遺構番号	時期	器種	漆量 (cm)					備考			
					長さ	幅	台厚	台厚	全高				
21-1	A区	柱川(足棚)	12c中葉	漆下駄	19.7	17.7	7.3	1.7	5.2	後面片方著しく摩耗			
21-2	B区	35b土坑		漆下駄	21.8	8.7	8.3	1.4	3.5	前面残存			
21-3	A区	柱川(足棚)	12c中葉	漆下駄	20.9	8.5	6.5	1.3	2.5	後面一部欠損			
21-4	B区	35b土坑		漆下駄	16.1	9.3	6.4	1.2	3.3	後面に少量の漆痕・砂粒付着			
21-5	A区	柱川(足棚)	12c中葉	制り下駄	21.7	8.5	8.5	2.3	—	竹裏に細網付着			
21-6	A区	柱川(足棚)	12c中葉	漆下駄	22.8	14.1	13.1	1.3	3.4	後面の漆に剥が			
21-7	A区	柱川(足棚)	12c中葉	漆下駄	14.3	13.1	14.0	1.4	2.9	子取用			
21-8	B区	35b土坑		漆下駄	21.8	19.0	7.4	2.6	7.0				
21-9	A区	柱川(足棚)	12c中葉	制り下駄	22.0	7.4	7.4	1.3	2.9				

第5表 木製品観察表

検出番号	調査区	遺構番号	時期	器種	漆量 (cm)				備考
					長さ	幅	厚	重	
20-1	A区	柱川(足棚)	12c中葉	箸(両口)	24.9	0.9	0.5	—	
20-2	A区	柱川(足棚)	12c中葉	箸(両口)	24.4	0.8	0.5	—	
20-3	A区	柱川(足棚)	12c中葉	箸(両口)	25.4	0.8	0.3	—	
20-4	A区	柱川(足棚)	12c中葉	箸(両口)	23.5	0.8	0.6	—	
20-5	A区	柱川(足棚)	12c中葉	箸(両口)	24.7	0.8	0.4	—	
20-6	A区	柱川(足棚)	12c中葉	箸(両口)	25.3	0.9	0.8	—	
20-7	A区	柱川(足棚)	12c中葉	箸(両口)	24.4	0.7	0.5	—	
20-8	A区	柱川(足棚)	12c中葉	箸(両口)	23.6	0.8	0.6	—	
20-9	A区	柱川(足棚)	12c中葉	箸(両口)	24.7	0.7	0.7	—	
20-10	A区	柱川(足棚)	12c中葉	箸(両口)	23.4	2.2	0.4	—	
20-11	A区	柱川(足棚)	12c中葉	箸(両口)	19.9	2.0	0.5	—	
20-12	A区	柱川(足棚)	12c中葉	箸	8.5	2.9	1.1	—	漆文数19枚
20-13	A区	柱川(足棚)	12c中葉	箸	18.0	1.6	1.0	—	漆文数28枚
20-23	A区	柱川(足棚直上)	12c中葉	納付	15.7	17.0	1.8	—	
21-10	A区	柱川(足棚)	12c中葉	加工木	19.6	8.2	6.7	—	
21-11	A区	柱川(足棚)	12c中葉	容器	28.9	11.2	1.2	—	
21-12	A区	柱川(足棚)	12c中葉	容器	24.8	17.0	1.0	—	
21-13	A区	柱川(足棚)	12c中葉	容器	19.4	15.0	0.8	—	横穴径10.5cm
21-14	A区	柱川(足棚)	12c中葉	釣瓶	12.5	13.3	1.3	—	
21-15	B区	35b土坑		灯明台	11.7	9.6	4.8	—	
21-16	A区	柱川(足棚)	12c中葉	燈	8.6	1.4	—	—	
21-17	A区	柱川(足棚)	12c中葉	灯子	11.1	3.1	5.5	2.9	
21-18	A区	柱川(足棚)	12c中葉	網	7.0	3.0	—	—	
21-19	A区	柱川(足棚)	12c中葉	置物	26.2	1.7	6.9	—	
21-20	B区	35b土坑		置物	18.0	1.4	0.4	—	漆痕残存
21-21	B区	35b土坑		置物	14.2	3.6	0.6	—	漆痕残存
21-22	A区	柱川(足棚)	12c中葉	針簪	12.2	3.0	6.9	—	
21-23	B区	35b土坑		容器	30.0	30.5	0.5	—	横穴径10.5cm
21-24	B区	35b土坑		針簪	12.1	17.1	0.5	—	漆痕残存
21-25	A区	柱川(足棚)	12c中葉	加工木	20.9	13.9	1.8	—	
21-26	A区	柱川(足棚)	12c中葉	加工木	16.5	11.2	1.9	—	横(径1.1cm)の一部残存

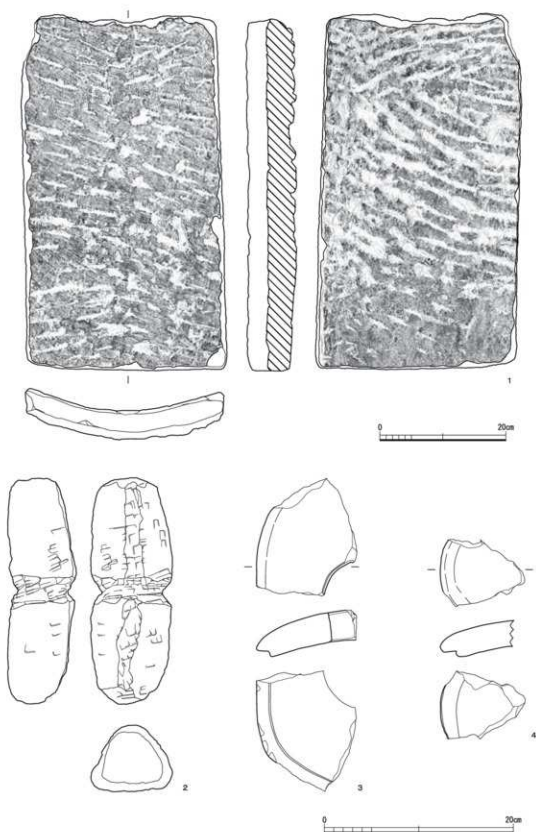
第3節 石製品

石製品は4点を図示した(第22図1～4)。すべて笄谷石裂である。平瓦(1)はほぼ完形で、凹面(表面)は平滑に加工されているが、凸面(裏面)は粗い仕上げである。ただ、瓦が重なり合う先の方3分の1ほどは、滑らかに仕上げられている。石錘(2)は、中央の挟りに紐を結わえ、何らかの錘として使用したものである。バンドコ(3)の蓋2点(3・4)のうち、前者(3)は中心に穴が開いている。

第6表 石製品観察表

検出番号	種類	調査区	遺構・部位等	漆量 (cm)						成形・調整・その他	石材	検出番号
				a	b1	b2	c1	c2	d			
22-1	平瓦	A区	凹面	36.0	21.6	28.5(内)	3.5	4.0	12.8	曲がり有り	笄谷石	11-19
22-2	石錘	A区	12b石・土坑	23.8	—	—	8.6	—	7.0	成形・調整・その他	笄谷石	11-5
22-3	バンドコ(蓋)	A区	41b(足棚)	—	—	—	—	4.9(内)	—	ミガキ調整、中央部穿孔	笄谷石	11-31
22-4	バンドコ(蓋)	A区	41b(足棚)	—	—	—	—	3.8(内)	—	—	笄谷石	11-30

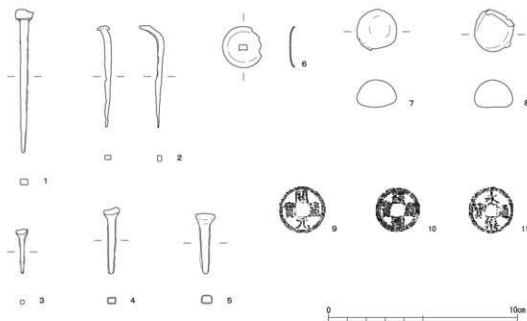
【注】平瓦の出来許測定部位については、凡例を参照すること。



第22図 石製品実測図(2～4：縮尺1/4 1：縮尺1/6)

第4節 金属製品

金属製品は23点を採取し、状態の良好な11点を図示した(第23図)。その内訳は、釘5点、座金1点、弾丸2点、銭貨3点である。釘は、遺構出土の3点(1・2・3)と包含層出土の2点(4・5)とがある。出土遺構は遺構102土坑(1・2)・遺構04井戸(3)である。いずれも巻頭釘である。座金(6)は、中央が膨らみ、縁がやや屈曲する円盤形で、中央に方形孔をもつ。弾丸2点(7・8)は、17世紀半ば以前の遺物を含む包含層から出土した。どちらも潰れた面があり、発砲・着弾を示す可能性がある。重さは36g・37g(9匁6分・約10匁)であり、本来の直径は20mm前後と見られる。重さからは十匁銃の弾丸と言えるが、重さに比べて直径が通常より大きい。10匁程度の弾丸を使用する銃は土筒などと呼ばれるが、そのうちでもやや大きめの十五匁銃の口径に相当する直径である。比重が軽いのは、弾丸の製造に際して原材料の鉛に混ぜ物を施したことによるものと考えられる。銭貨は、開元通寶(9)、唐國通寶(10)、永樂通寶(11)が遺構41川下層から出土している。



第23図 金属製品実測図(縮尺1/2)

第7表 金属製品観察表

採掘番号	種別	出土状況		計測値 (mm, g)				備考	出土状況の主な遺物の時期	実測番号
		調査区	遺構・層位・トレンチ	長さ	太さ	幅	重さ			
22-1	釘	A区	(不明)	25	3.5	3.5	9.5	6.9	巻頭釘	M1-1
22-2	釘	A区	北半(遺構・層位)	24	3.5	3.5	6	3.5	巻頭釘	17c 中層～後層 M12-1
22-3	釘	B区	102土坑(上層・整理層)	23	2	4.5	6.5	1.6	巻頭釘	18c 後層～19c 前02-3
22-4	釘	A区	04井戸(井戸埋土)	25	4	6	8	3.0	巻頭釘	19c 後層～近代 M14-2
22-5	釘	B区	102土坑(下層・整理層)	22	5	5	10	3.5	巻頭釘	17c 中層～後層 M102-1
22-6	座金	A区	41川(下層)	径	厚	重	孔	重さ	方形孔	17c 中層 M11-4
				22	6.3	3.5	4×2.5	3.0		
				径	厚	重	孔	重さ		
22-7	弾丸	B区	2面	21	14.5			36.9	片側に面あり	～17c 中層 M19-1
22-8	弾丸	B区	2面	20	14.5			37.6	片側に面あり	～17c 中層 M19-2

第8表 銭貨観察表

採掘番号	銭文	初時	出土地点	計測値 (mm)			備考	出土地点の主な遺物の時期	実測番号
				径	内区径	方孔径			
22-9	開元通寶	唐 621年	A区	41川(上層)	2.45	2.1	6.7	17c 中層	M11-1
22-10	唐國通寶	南唐939年	A区	41川(上層)	2.3	1.9	6.7	17c 中層	M11-2
22-11	永樂通寶	明 1408年	A区	41川(下層)	2.4	2.1	6.6	17c 中層	M11-3

第5章 まとめ

ここでは、各調査面と遺構の時期について各時期の福井城下絵図を参照しながら考えてみたい。

1 第6面(第9図)

遺跡の最下面にあたる。遺構41川は、自然の窪地、あるいは流路と考えられる。遺構41川の覆土や遺物出土状況は、これが人工的に一気に埋め立てられたことを示している。遺構41川上層(遺構40)は、断面観察からこの流路がその後もしばらく残ったものと考えられる。6面は、ここが屋敷地になる前の状況を示しており、福井城下絵図中最古の「北之庄城郭古図」1311(慶長18年(1613)頃)にみえる「川原」にあたると思われる。また、遺構41川の出土遺物をみると、大橋Ⅱ期の肥前陶磁が中心で、Ⅲ期以降の遺物が少ないことから、17世紀前半には埋没したものと考えられる。

2 第5面(第8図)

ここが屋敷地になって最初の生活面である。確認された遺構を見ていくと、埋め立てられた遺構41川を切る形で素掘りの遺構30堀が作られる。南側で収束するため、掘り残し部分は通路であったと想定される。この遺構30堀の方位は南北座標軸に対し東へ10度振る。城下絵図によると、この場所の足羽川に沿った屋敷地境は、寛文大火(寛文9年(1669))以後は石垣で示されるのに対し、大火以前はやや東に振り墨線1本で示される。これまでの調査例から、屋敷地境が溝の場合、絵図上では一本線で表示されることが多く、東に振れる方位と合わせて、遺構30堀は絵図に見える大火以前の屋敷地境と考えることができる。なお、遺構30堀底面で唐津焼(第17図30-2)が確認された。絵図でこの地に屋敷地が初めて記されるのは、万治2年(1659)以前作成の「御城下之図」1314である。正保期(1644~48)作成の「福居城下絵図」1322では未だ屋敷地は記されていないことから、ここに屋敷が作られたのは1644~59年の間となる。なお、調査地の住人は、「御城下之図」1314によると、「加藤内膳下屋敷」とされている。

3 第4面(第7図)

遺構30堀が川砂で埋め立てられ、屋敷地の範囲が遺構30堀から川側(西側)へと拡大する。遺構31石組溝や礎石と考えられる集石群、調査区南側の遺構33礎石が確認された。建物もしくは塀等が展開したと考えられる。これらの遺構群の方向は座標軸と並行する。B区では、遺構135土坑等が座標東西線と並行することから同時期と考えられる。

4 第3面(第6図)

集石(礎石)群の上に石垣が作られた時期である。石垣の方向は4面の遺構群と平行する。石垣築造と同時に屋敷地内を川砂で盛土し、生活面を形成した。石垣内側に当たるA区北半部では遺構は確認されず、広場のような状態であった。寛文大火以降の絵図では、ここに石垣の表示がみられる。この地は被災しなかったが、被災の有無に関わらず、復興に際して城内で大規模に改修がおこなわれたことが、他地点の調査から知られている。この屋敷地でも、大火の復興事業を機に石垣を築いたと考えられる。以上のことから、3面には大火直後の1669年頃という年代が与えられる。なお、寛文大火以降廃藩に至るまで、この地には「芦田」家が代々居住していたことが各時期の絵図からわかる。

5 第2面(第5図)

石垣の内部(屋敷地内)が、石垣南側の通路状の部分を含め、川砂と粘土の互層で埋め立てられ、新たに遺構02石列で護岸した通路状遺構が作られる。遺構02石列は、方位を5面の遺構30堀と同様南へ10度振るが、通路状遺構内の遺構07溝や、その南側の礎石群や遺構08落ち込み等は石垣と同じく、方位が南

北座標軸にそろっている。なお、盛土内の粘土・砂層の境目に、完形の土師質皿が散乱した状態で確認されている。その範囲は遺構02石列より北で、B区南半まで広がる。皿の配置状況に規格性は見られず、その目的・性格は不明である。また、土師質皿が散乱する粘土面が、生活面か間層かということも、限定された調査範囲内では判断できなかった。

6 第1面(第4図)

2面上を、さらに川砂利等で高く盛土する。盛土層上面は攪乱を受け、江戸時代の生活面を明確に検出できなかったため、1面は遺構確認面である。盛土内から、少量ながら17世紀後半の遺物が出土している(第19図1面～1～3)ことから、これ以降に造成されたと考えられる。この面で確認された遺構は、遺構04井戸等19世紀代のものである。なお、城下を南西から捉えた「福井城下眺望図」では、足羽川越しに幕末の調査区付近を描いており、石垣の上に塼や長屋が連なり、すぐ内側には松等の大木が林立する様子が描かれている。

以上、非常に限られた調査区であり、上級武士の生活空間を復元できる大きな成果はえられなかった。しかし、絵図には表現されていない遺構の存在や建物の方位の変化等、今後の研究課題を提示できた。



第24図 5面遺構と屋敷割対照図(寛文大火前)
(縮尺1/2,000)



第25図 3面遺構と屋敷割対照図(寛文大火後)
(縮尺1/2,000)



第26図 「福井城下眺望図」(部分・芦田邸裏側)



第27図 「福井城旧景」(芦田信濃邸・部分)

写 真 图 版



(1) A区2面全景(南より)



(2) A区5面全景(南より)



(1) 石垣(東より)



(2) 石垣角部(南東より)



(1) 遺構02石列および西面堆積状況(南東より)



(2) 遺構02石列(南より)



(3) 遺構03石列(南より)



(4) 遺構31石組溝(南東より)



(1) 遺構30堀および埋立て状況(南より)



(2) 遺構30堀埋立て状況(西より)



(3) 遺構41川完掘全景(南東より)



(4) 遺構41川堆積状況(西より)



(1) B区1面全景(北東より)



(2) B区3面全景(北東より)



(3) B区2面土師質皿出土状況および堆積状況(東より)



(4) 遺構134石列および西壁土層堆積状況(東より)



(1) 遺構134石列周辺(北東より)



(2) 遺構132・133石列(西より)



17-30-1



17-30-2



17-30-3



17-41-1



17-41-2



17-41-3



17-41-5



17-41-6



17-41-8



17-41-10



17-41-11



17-41-9



18-41-14



18-41-16



18-41-23



18-41-17



18-41-18



18-41-24



17-08-1



18-104-3



18-104-7



18-10-1



19-1面-1



19-1面-2



19-1面-3



19-2面-1



19-4面-1



19-B2-2



19-A2-1



19-A2-5



19-B2-3



19-A2-2



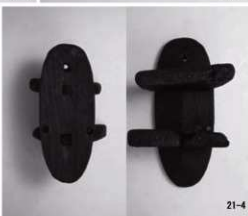
19-A2-6

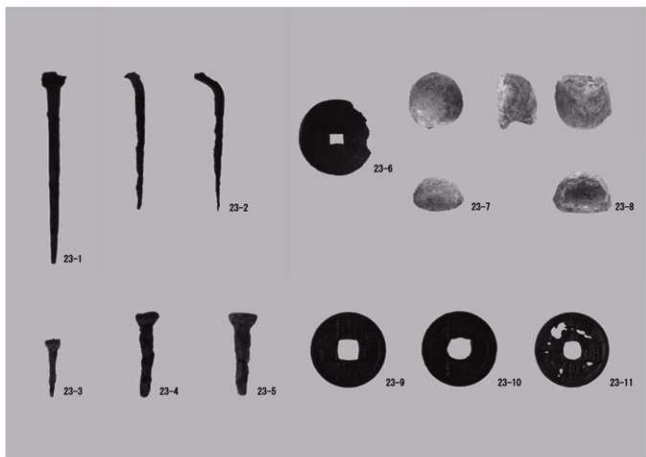
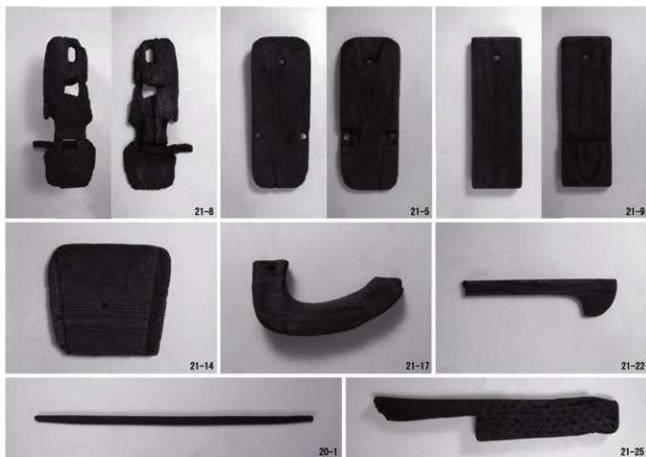


22-2



22-3





報 告 書 抄 錄

ふりがな	ふくいじょうあと								
書 名	福井城跡								
副 書 名	足羽川激甚災害対策特別緊急事業に伴う調査								
巻 次									
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号	第 123 集								
編 著 者 名	中原義史 本多達哉 御嶽貞義 河村健史 岩田 隆								
編 集 機 関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター								
所 在 地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町 4-10 TEL0776-41-3644								
発行年月日	西暦 2011 年 3 月 31 日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村		遺跡 番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ふくいじょうあと 福井城跡	ふくいけん 福井県 ふくいし 福井市 ちゅうおう 中央 2 丁目	18201	01141	36° 5' 49" ～ 36° 5' 53"	136° 22' 9" ～ 136° 22' 12"	20070423 ～ 20070724	462㎡ (表面積)	足羽川激甚 災害対策特 別緊急事業	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特 記 事 項	
福井城跡	城郭 城下町	近世	石垣・石列・礎石・ 堀・溝・井戸など			土器・陶磁器・木製 品(下駄・漆器・箸・ 木簡等)・笏谷石製 品(瓦・バンドコ 等)・金属製品(釘・ 弾丸等)			
要 約	泉橋架け替えのための取り付け道路変更に伴う調査。調査地は、福井城の百間堀と足羽川には さまれた上級武士の屋敷地内に当たる。6つの遺構面を確認し、17世紀前葉の「川原」の状態から、 17世紀半ばの屋敷地の造成と、寛文大火(寛文9年(1668))後の改修工事に至る状況が確認できた。 しかし、調査地が狭小であり、屋敷地内の土地利用や建物配置等を明らかにすることはできなかった。								

福井県埋蔵文化財調査報告 第123集

福井城跡

－ 足羽川激甚災害対策特別緊急事業に伴う調査 －

平成23年3月10日 印刷

平成23年3月31日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 足羽印刷株式会社

〒918-8231 福井市問屋町3丁目212
